

---

## 「第8・9回特発性心室細動研究会」特集号の発行にあたって

---

特発性心室細動研究会 (I-IVFS) 代表幹事 平岡昌和  
(東京医科歯科大学名誉教授・労働保険審査会)

本特集号は、2010年2月と2011年2月に開催された第8・9回研究会での発表を記録した合同特集号である。これまでの研究会では、主にBrugada症候群の成因・診断・臨床症状・予後予測や治療方法に関する調査研究結果報告や各施設からの臨床報告が行われてきた。ところがここ数年、Brugada症候群に特徴的な心電図右胸部誘導( $V_1 \sim V_3$ )でのST上昇を伴わずに心室細動(VF)・突然死を呈する(狭義の)「特発性心室細動」の報告が相次いでいる。これらの「特発性心室細動」症例は、心電図にてJ波を呈するものが多く、それも $V_1 \sim V_3$ 誘導ではなく、下壁誘導(II・III・aV<sub>F</sub>)や側壁誘導(I・aV<sub>L</sub>・ $V_4 \sim V_6$ )に認められるといった特徴を有している。さらに、Brugada症候群と類似の臨床所見を呈して同じ成因を疑わせるものの、 $V_1 \sim V_3$ 誘導以外のJ波の合併がその予後予測に有用であるか否かについては見解の分かれるところである。また、J波を有する「特発性心室細動」症例ではBrugada症候群とは異なる臨床的特徴をもつものもあり、異なる病型や成因を含む幅広い病態を示す可能性も示唆される。

本特集号では、各施設からこのような幅広い病態を示す「特発性心室細動」症例が紹介されている。また、Brugada症候群などにおいてはICD植込みが突然死を防ぐ唯一確実な方法とされているが、ときにVFストームに見舞われその対応に苦慮することが経験されるため、VFストームの特徴や対応について研究会事務局がまとめた調査結果や各施設からの経験は、こうした症例に遭遇した場合に有用な示唆を与えると考えられる。

本研究会においては、毎回スポンサーのご好意で海外から研究者を招き、イブニングセミナーとして特別講演をお願いしている。第8回研究会では、Gussak博士に“Early Repolarization : ECG Phenomena and Arrhythmogenic Potential”として早期再分極をめぐる臨床的な諸問題と新しい解釈を、Viskin博士に“*What Do We Know (or Think) about Idiopathic Ventricular Fibrillation?*”として先生の豊富な臨床経験に基づく特発性心室細動の現時点における臨床的な特徴・対応策・予後などに関する問題点をお話いただいた。第9回研究会では、Brugada症候群の発見者であるP. Brugada博士に“Brugada Syndrome; Electrocardiographic Insights”として先生の現時点における本症候群の心電図学的な成因・特徴・意義などについてお話いただき、聴衆に多大な感銘を与えた。3人の講演は抄録のみの提示であるが、そのエッセンスは汲み取ることができると期待するものである。

平成24年2月